

紀行文



北海道 物語の 舞台駅



1999.9.12

著・京都太郎

北海道物語の舞台駅

前夜に羽田からのAIRDO便で北海道入りし、札幌の大通公園近くのホテルに宿泊し、明けて九月二日、札幌九時三〇分発のライラック3号で深川へ。留萌線の発車時刻まで三十分以上あるが、混雑を予想し駅写は後回しにして、ホームで待機して窓側の座席を確保。

好天の中、定刻の一〇七分に深川を発車。一〇時三二分に目的地の恵比島駅に到着。しかし恵比島という駅名表示はホームの駅名標くらいで、後はすべてドラマ『すずらん』での設定のままの「明日萌」となっていて、すざいにぎわいであった。あたりをうろろしていたら二度も「カメラのシャッター押してもらえませんか」と声がかかった。

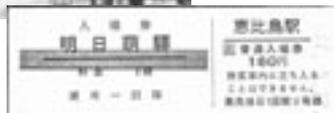
仮設の土産物屋をひやかしてみると、陳列はされていなかったのに、店のおじさんが僕の顔を見るなり「入場券あるよ」と硬券の入場券を勧めてきた。こっちも好都合で五枚購入した。

臨時運転されているSL「すずらん号」の到着と同時に人だかりが一段と増え、しばらく僕もミラー気分ですLの撮影に勤しんだ。SLの発車を見送った後、ゆでとうきびをパクついたが、さくさくしてなかなかの美味で結構空腹も満たせた。

ちなみに僕自身、肝心のドラマの方はたったの一度も見ることがなく、完璧に感化されているミラー客の一人で



明日萌駅



あった。

一二時五二分恵比島を後にして、一三時一五分に深川に戻り、駅写をして駅前のコンビニで昼食を調達して、一三時四〇分発の「ライラック9号」で旭川へ。

旭川着が一四時ちょうどで、次に乗る富良野線の発車時刻は一四時二分なので、乗り継ぎ時間は二十分以上あるのだが、今までの経験を踏まえ、混雑が予想されるので改札は出ずに長い地下道で結ばれている富良野線のホームに行くと、ちょうど二両編成のシルバーボディの列車が入線してきて、ゆうゆう好きな座席に座れた。そうこうしているうちに予想通り、ぞくぞくと観光客や地元の人がやってきて車内は埋まった。

美瑛で三分の連絡で「ノロッコ号」に乗り換えなので、慌ててヘッドマークをつけた機関車を撮っていると、二人づれの女性客からまたまた「シヤッターブリーズ」。一五時ちょうどに美瑛をゆつくりと発車。しかしガタゴトのんびり進むに従い、雲行きが怪しくなってきた。

一五時三七分に季節を限定して臨時に設置されているラベンダー畑駅に到着。一緒に下車した若い女性の五人グループは近くのファーム富田に行ったようだ。太陽が大きな雲に隠れてしまっていたので少し待っていたが、しびれを切らして板張りのホームが田園風景の中にポツンとあるだけの駅をとりあえず駅写して、隣駅の中富良野へ徒歩で向かった。

持参の時刻表では一六時三五分に中富良野から乗った富良野行きを終着の到着時刻は一六時四四分で、乗り継ぐ新得行きも同じ四四分発となっている。果たして連絡しているのだろうかと不安を抱きつつ、富良野到着と同時にあわてて乗り換えたが、何の事はなく発車時刻は四七分であった。このことはもう一つ持参していた「JR北海道ダイヤ」にしつかり載っていた。うーむ、何のためにわざわざ大阪で買ったんやと自己嫌悪。

一七時三四分、映画「鉄道員(ぽっぽや)」の舞台、幾寅着。思ったよりもまだ明るかったので、あちこち写真を撮ってまわった。ここも恵比島同様、すっかり映画の設定上の架空の駅「幌舞駅」と化していたが、ここにはわずかに本来の「幾寅」という表示があちこちに見られた。駅前には映画のために作られたセットの建物が四つ残っていた。すずらんとは違い、映画を観に行ったので胸の高なりとともに不思議な気分になった。

夕景をバックにパチパチと駅写して駅に戻ると、何と駅員さんがいる時間を少しまわっていて、残念ながらスタン



幌舞駅

プも押せず、入場券も買えなかった。そういえば僕が駅写している時にJR北海道の名前が入った車で男の人が一人出ていったようだった。

みるみるうちに外は真っ暗になり、訪れる人はまばらとなったが、一組帰っては一組やってくるパターンであった。こうして約二時間滞在して、一九時二三分にすっかり闇に包まれた幾寅駅を後にした。

新得で「スーパーパーおおぞら12号」に乗り換え、一旦二二時一七分に札幌に戻り、夜行の「オホーツク9号」で道東の網走に向かった。